

小学校生き方探究教育のさらなる充実を求めて —実生活・実社会につながる、教科における学習モデルの提示—

井上 拓哉

生き方探究教育が求められている背景として、「京都市キャリア教育スタンダード〈概要編〉」が指摘している「学習と生活の乖離」という課題がある。このことを解決していくためには、「いま、自分が学んでいることは、実生活・実社会でどのように役立つか」という学習と生活との“つながり”を、児童に気付かせることが重要である。

昨年度の研究では、教科で生き方探究教育を実践していくことがこの教育の充実をうながすと考え、具体的な学習モデルを示した。今年度は、昨年度の研究成果を踏まえつつ、実生活・実社会と学習とのつながりをはじめとした様々な“つながり”に焦点を当て、国語科、算数科、理科における実践の在り方を提示した。また、どの授業にも取り入れることができる生き方探究教育の視点を踏まえた学習活動・授業展開の工夫をまとめ、研究の中で作成した学習指導案とともに、実践事例集として提示する。更に、この教育の理論・実践方法などをわかりやすくまとめた「校内研修用資料」の作成にも取り組み、成果物として発信する。

第1章 つながりに気付かせる生き方探究教育

第1節 教科学習を新たな視点で

生き方探究教育で育てたい力を、教科学習の中でいかに育てていくのか。その際、重要となるのが、様々な“つながり”に児童が気付くようにするという点である。生き方探究教育の視点を踏まえた学習活動や授業展開の工夫を授業に取り入れることによって、児童のキャリア発達をうながすことが可能になると考える。

また、全市の生き方探究教育主任を対象としたアンケート調査の結果から、半数以上の学校で、この教育に関する校内研修が行われていないという実態が明らかになった。このことを受け、より具体的でわかりやすい実践方法と、活用しやすい校内研修用の資料の提示が早急に必要であると考えた。

第2節 生き方探究教育の新しい方向性と育てたい力

平成23年1月に、中央教育審議会から出された答申で、今後のキャリア教育の新たな方向性が示された。本市では平成24年2月に、この新しい方向性を踏まえた上で、今まで示してきた「5領域17の力」を改編し、生き方探究教育で育てたい力として、新たに図1のような「4つの力」を提示した。

4つの力	
共生と自立	人とともに社会を生きる力 (人間関係形成・社会形成能力)
	自分を知り、律する力 (自己理解・自己管理能力)
	課題を見つけ、解決する力 (課題対応能力)
	夢や希望をつくりあげる力 (キャリアプランニング能力)

図1 生き方探究教育で育てたい「4つの力」

図1は、生き方探究教育で育てたい力として、新たに提示した「4つの力」を示している。これは、従来の「5領域17の力」を改編したものである。

第2章 教科で実践する生き方探究教育

第1節 教科での実践に向けて

生き方探究教育の教科での実践に向け、指導計画の作成から実践するまでの間で、どのようにこの教育の視点を取り入れるかを示す必要があると考えた。そこで、この教育の視点を取り入れた授業展開を考える手順を示した。

また、生き方探究教育で育てたい「4つの力」を育成することを意識し、「授業に取り入れたい学習活動・授業展開の工夫」を具体的に示すことが重要であると考え、提示した。

第2節 振り返り活動の意義と実践方法

児童が様々な“つながり”に気付くためには、自分自身をメタ認知できるかどうか鍵をにぎると考える。生き方探究教育の実践により授業が充実することは、児童のメタ認知をうながし、自分を客観的にとらえることを可能にする。そのことが、社会的・職業的自立に向けたキャリア発達につながることを考える。

児童のメタ認知をうながすために「振り返り活動」を授業に取り入れることが重要である。取り

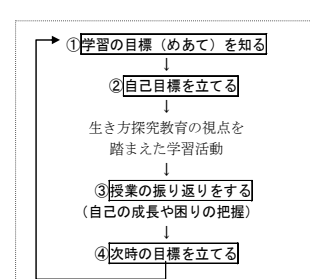


図2 生き方探究教育の視点を踏まえた授業の流れ

入れた際の授業の流れを、図2のように考えた。また、振り返り活動を継続して取り組むことができるように、ノートの活用方法をはじめ、様々な工夫をして活動の充実を図ることが大切である。

第3章 “つながり”を意識した教科学習の実践

第1節 第2学年算数科「ふえたり へったり」 「計算の じゅんじょ」

この実践では、主に「学習内容と実生活とのつながり」に児童が気付くような授業展開の工夫を授業に取り入れた。文章題に取り組む際には、問題場面をイメージしやすくするような画像を提示し、児童の過去の体験を交流する時間を設定した。そうすることで、問題文のイメージを広げ、意欲的に文章題に取り組もうとする児童の姿が見られた。

また、ペアやクラスでの話し合い活動を積極的に授業に取り入れることで、児童は学習の理解を深めるとともに、「友だちとのつながり」にも気付くことができていた。

第2節 第4学年国語科「説明の仕方を考えよう」 「写真と文章で説明しよう」

この実践では、主に「人や社会とのつながり」に児童が気付くような学習活動を授業に取り入れた。仕事リーフレットを作成する際に、インタビュー活動を通して、働く人の思いや願いにふれ、自分の属している社会とのつながりを実感することができた。

また、単元の終わりに行った仕事リーフレット発表会には、ゲストとして校長先生をお招きした。校長先生に聞いてもらうという相手意識をもつことで、緊張感と意欲をもって、仕事リーフレットの作成や発表会の練習に取り組む児童の姿が見られた。発表会の感想では、「校長先生からほめてもらってうれしかったです。」というような、充実感が伝わってくる内容の記述が多く見られた。

第3節 第6学年理科「生物とそのかんきょう」

この実践では、主に「様々な生物とのつながり」

に児童が気付くような学習活動を授業に取り入れた。図3のような生態ピラミッドの模型を作成する活動を通して、児童は生態系における自分の役割や位置を客観的にとらえるとともに、様々な生物とのつながりに気付くことができていた。

また、自分も環境問題に

深く関わっていることを知った後で、「これからの自分にできること」というテーマで感想文を書いた。活動を通して、児童は、学習したことを自分の将来の生き方や考え方につなげることができた。



図3 作成した生態ピラミッドの模型

第4節 第6学年国語科「作品の世界を深く味わおう」

この実践では、主に「友だちや作者とのつながり」に児童が気付くような学習活動や授業展開の工夫を授業に取り入れた。作品から宮沢賢治の生き方や考え方を読み取るために、グループやクラスでの話し合い活動を多く取り入れた。読み取った情報をウェビングマップにまとめる活動を通して、友だちの意見と自分の意見をつなげて考えたり、違った考えを自分の考えに取り入れたりする児童の姿が見られた。ウェビングマップの作成に伴うグループやクラスの話し合いに積極的に取り組むことで、児童は、友だちと協働することの意義や楽しさを感じることができた。

また、単元の終わりには、作者の生き方や考え方を踏まえ、「これからの自分はどのように生きていくか」というテーマで感想文を書いた。作者とのつながりを強く感じ、自分の生き方に真剣に向き合おうとする児童の思いが伝わってきた。

第4章 生き方探究教育の充実をめざして

第1節 研究の成果と課題

成果としては、児童が様々なつながりに気付くことにより、教科学習の中で、「4つの力」の基礎を培うことができたことが挙げられる。また、児童の学習に取り組む様子や振り返りの記述から、学習意欲の向上や学習理解の深まりを感じることができた。

課題としては、生き方探究教育の視点を踏まえた授業と普段の充実した授業との間に、どのような違いがあるのかということを十分に説明できなかったということが挙げられる。成果物の中では、「生き方探究教育の視点を踏まえた学習活動・授業展開の工夫」を授業に取り入れる際の留意点を示すことで、違いを明らかにするようにした。

第2節 生き方探究教育を学校教育の中核に

生き方探究教育を更に充実させるためには、一人一人の指導者が、この教育の意義を十分に理解して実践を進めると同時に、学校体制として取組を推進していくことが重要である。その際、各校の生き方探究教育主任が中心となり、この教育の全体計画を作成するとともに、校内研修を計画的に行っていくことが求められる。

そこで、生き方探究教育の理論や実践方法を、校内研修の中で活用しやすい形にまとめ、「校内研修用資料」として提示した。他の成果物とともに発信することで、この教育のさらなる充実をめざしたい。